

## 【特集】

感情知性をどう育てるか  
—大学教育の革新—小松 佐穂子<sup>1)</sup>\*, 箱田 裕司<sup>2)</sup>

1) 徳山大学 福祉情報学部, 2) 京都女子大学 発達教育学部

これまで頭の良さを表す物差しとして、IQ、知能指数という概念があった。しかし近年、IQに関わる能力よりも、感情に関わる能力である“感情知性 (Emotional Intelligence)”という概念が注目を集めている。感情知性とは、自分自身や他者の感情を読み取ったり表現したり、コントロールしたりする力であり、対人コミュニケーション場面や社会生活の中で用いられる力である。大学教育ではこれまで、主に専門性を身につけることを重視してきたため、対人コミュニケーション力の育成にまで重点を置いてこなかった。しかし大学の現場では、社会性のない、人に共感できない、感情抑制のできない学生が増えてきていることが感じられる。大学卒業後、社会に入り、特に複雑に多様化した現代社会に対応するためには、IQに関わる能力以上に高い感情知性の力が求められるだろう。本稿では、感情知性を訓練する取組みを大学の教育課程の中で実践している例を紹介し、その教育効果についての研究報告、および大学教育の中で感情知性をどう育てるか提言を行う。

## 1. はじめに

私たちは、日常会話において「あの人は頭が良い」という言い方をよくする。しかし、「頭が良い」という言葉はきわめて多義的である。「頭の回転が速い人」、「学業成績の良い人」、「有名校卒の人」、「よく気がきく人」、「配慮が行き届く人」、これらすべての人が頭が良いのである。

これまで頭の良さを表す物差しに、IQという概念があった。前述の例では前三つの例がIQと深い関係があると思われる。心理学の研究は20世紀初頭のBinetとSimonの知能検査の開発を皮切りに、これまでもっぱらIQ (Intelligence Quotient) に向けられてきた。しかし、最近になって、IQとは異なる、感情と深く関わる知性の側面に関心が向けられることになった。確かにこの側面は以前はあまり重視されなかった知性の側面であるが、しかし、大学教育において、そしてむしろ社会に出てから、その人の人物評価に強く影響するものと考えられる。本稿では、感情知性の定義、感情知性の説明モデル、感情知性の測定法、感情知性の訓練や教育、そして大学における実践例について述べる。

## 2. 感情知性とは？

感情知性とは、Emotional Intelligence Quotient (EI, もしくはEQと略される) のことであり、自分自身や他者の感情を表したり、理解したり、コントロールしたりする力、特に、対人コミュニケーション場面や社会生活の中で用いられる力である。日本では他にも「情動性知能」などと呼ばれたりし、一般には「心の知能指数」という言葉で浸透している。

感情知性という概念は、心理学者であるSalovey & Mayer (1990) が論文の中で初めてEI (Emotional Intelligence) モデルを提案したことで誕生した。その後、Goleman(1995) が一般大衆向けに出版した“Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ” (『EQ—こころの知能指数』土屋訳, 1996) がベストセラーになったことで、一般の人々にも知られるようになった。このような背景には、感情知性が、一般的な頭の良さを表す知能指数、すなわちIQよりも社会的な成功を予測しうること、そしてIQと比べて訓練や教育により容易に向上しうるというイメージを持たれたことがあり、今でも多くの人々の関心を集めている。

\*) 連絡先: 〒745-8566 山口県周南市学園台 徳山大学福祉情報学部 komatsu@tokuyama-u.ac.jp

## 2. 1 感情知性のモデル

1990年に心理学の分野で始まった感情知性の科学的研究は、モデルと測定法の研究から始まっている。

さまざまな研究者が感情知性の説明モデルを提案しているが、多くの研究者間で一致しているのが、いくつかの下位因子からなっているという点であり、因子の種類も、研究者間で共通点が見られている。それは、「自己感情の認識(アウェアネス)」「自己感情の表現(アサーションなど)」「自己感情のコントロール」「自尊感情」「他者感情の理解」「共感」「社会的スキル(対人関係, 集団のマネジメント)」である(マッシュューズ, 2011 小松訳)。

## 2. 2 感情知性の測定法

感情知性の測定法には、大きく分けて2種類の評価法があり、一つは決められた質問項目に回答する形で評価する質問紙法であり、もう一つはIQ検査のように客観的なテストを用いて評価する能力テスト法である。各測定法には長所と短所があり、質問紙法は集団で簡便に実施できる反面、自己評価であるため回答が主観などによって歪んでしまう可能性がある。その点、能力テストは客観的に能力を測定できるが、標準化が難しかったり、実施にコストがかかるという短所がある。現時点で標準化されている能力テストは、Salovey, Mayerたちが開発したMSCEITテスト(Mayer et al. 2002)が有名であるが、一般にまで普及しているとは言い難い。その背景には、実施の難しさがあるだろう。

感情知性の概念が誕生して25年以上経ち、モデルと測定法の研究は、一つの区切りを迎えている。

## 2. 3 感情知性の訓練・教育

そこで次なる研究の展開としては、感情知性の教育研究に向かっている。先述の通り、IQと比べて感情知性が一般の人々の関心を集めたのは、IQとは異なり感情知性が訓練、教育できると考えられたためである。現状では、モデル・評価法の研究が追いつかないままに、主に産業界において商業目的で開発された多くの感情知性訓練プログラムが新入社員研修などで実施されている。これらの感情知性訓練プログラムの科

学的根拠は不明瞭で、根拠の伴う感情知性教育プログラムこそが、実践されるべきである。

一方、大学教育ではこれまで、学術の中心として主に専門性を身につけることを重視してきたため、大学教育の中で、専門の知識・技術等を獲得しそれを活用するために必要である「対人コミュニケーション力」の育成にまでは注目してこなかった。そこで次章では、「対人コミュニケーション力」「人間力」を向上させるために、感情知性教育を大学の教育課程に取り入れている実践例を紹介する。

## 3. 大学における感情知性教育の実践例—徳山大学の例

### 3.1 徳山大学の概要

徳山大学(学長:岡野啓介)は、山口県東部の周南市にある私立大学である。1971年に創設され、当時の徳山市長と市議会が誘致し、学校法人「徳山教育財団」が経営をする公設民営型の大学である。2016年度で創立45周年を迎えた。経済学部(2学科)、福祉情報学部(1学科)の2学部で構成されており、学生数は1学年経済学部250名、福祉情報学部50名の4学年、計1200名程度の地方小規模大学である。

### 3.2 徳山大学におけるEQ教育の位置づけ

徳山大学の建学の精神は「公正な社会観と正しい倫理観の確立を基に、知識とともに魂の教育を重視する大学を目指す」ことであり、「個性の伸長を本旨とする『知・徳・体』一体の教育を行う」ことを教育理念として掲げている。ここで言う「徳」とは、「知」「体」といった諸能力を生かし集団や社会全体にとって良い結果・成果を上げるための能力のことであり、「知」「体」だけでなく、「徳」の教育を具現化するものとして、感情知性教育、すなわちEQ教育が始まった。徳山大学では、感情知性を「Emotional Intelligence Quotient」の略語である「EQ」と表現しているため、ここでは感情知性を「EQ」と述べることとする。

徳山大学ではEQ力を、自立した人間として力強く生きていく「総合的な人間力」として捉えている。また、EQ教育を「キャリア教育の基盤」としても位置付けている。「キャリア」とは、社会における「自分

の価値と役割」を見出し、その「役割の遂行」を通して、「自分らしい生き方」を実現していく、その過程の積み重ねのことである。

文部科学省の中央教育審議会（2011）は、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」の答申の中で、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要となる能力を明確化した（図1）。

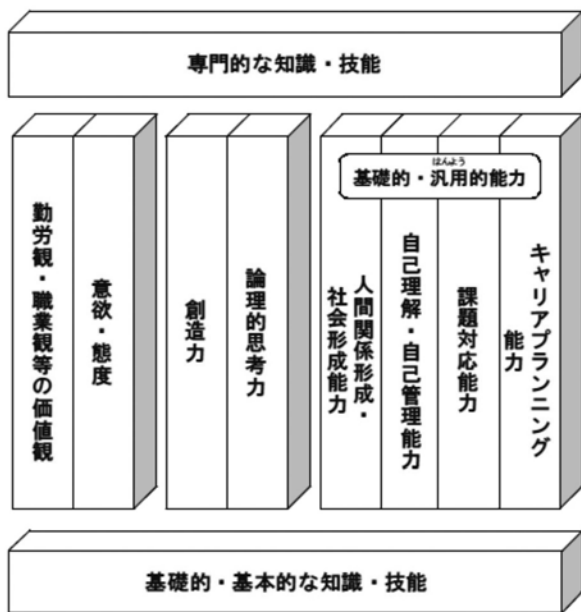


図1 社会的・職業的自立に必要な力  
(中教審, 2011より転載)

日本経済団体連合会（2009）が発表した「2008年度・新卒採用に関するアンケート調査結果」によれば、学生の就職先である企業が新卒者に期待するのは、専門性等の即戦力より、「コミュニケーション能力」「協調性」「主体性」「誠実性」「責任感」などの基礎的な能力であった。中央教育審議会（2011）の答申で整理された能力の中で、これらの基礎的能力にあたるのは「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」であり、まとめて「基礎的・汎用的能力」と呼ばれている能力であろう（図1）。この「基礎的・汎用的能力」を、専門的な知識・技能、創造力・論理的思考力などとともに、キャリア教育において育成すべき能力とした。

「基礎的・汎用的能力」のうち、「人間関係形成・社会形成能力」とは、「多様な他者の考えや立場を理解し、

相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができる」とともに、自分の置かれている状況を受けとめ、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」としている。また「自己理解・自己管理能力」とは、「自分が『できること』『意義を感じる』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力」としている。徳山大学では、この「人間関係形成・社会形成能力」と「自己理解・自己管理能力」が「EQ力」と重なると考えた。EQ教育を実践することがキャリア教育の基盤を担うと考え、2007年度からEQ教育を全学的に開始した。「EQ教育」は2017年度で10年目を迎え、徳山大学の大きな特色として、学生、教職員、地域社会にまで浸透している。

### 3.3 EQ教育プログラムの内容

2007年度から開始した徳山大学のEQ教育ではまず、以下の能力を育成対象としてあげ、教育プログラムを構築した。

#### 【I】「セルフコントロール&コミュニケーション」

自己を正しく認識し表現・制御すると共に、他者に興味を持ちその立場を理解する能力、及びその為に必要となるコミュニケーション力。

#### 【II】「チームビルディング&リーダーシップ」

グループの目的達成のため、自分の役割を認識し実行すると共に、グループ全体の協力体制を作り上げる能力。

#### 【III】「ソーシャリティー」

実社会の様々な環境に対応しながら、他者と共同して成果を挙げていくマネジメント能力、及び、社会人としての適切な行動様式。

そしてこれらの能力育成のために、全学対象の総合科目の中に「EQ教育系」の科目群を設けた。そこに「EQトレーニングⅠ、Ⅱ、Ⅲ」、「行動マネジメント（1年次開講）」、「問題発見と解決（2年次開講）」、「プレゼンテーション（3年次開講）」、「意思決定科学（4年次開講）」（それぞれ2単位）を配置し、これらから

表1 育成対象とする8つのEQ

	〈自己対応〉	〈対人対応〉
〔認識〕	【①自己認識】 自己肯定意識・自我同一性	【⑤他者理解・共感性】 共感性・他者意識
〔理解〕	【②自立性・柔軟性】 自尊感情	
〔表現〕	【⑥自己表明力】アサーション	
〔管理〕	【③目的達成力】 自己効力感	【⑦チームビルディング】 協同作業認識・集団形成力
〔制御〕	【④打たれ強さ・忍耐力】 ストレス対応・コーピング	【⑧ソーシャリティー】 社会的スキル

最低4単位を修得することを卒業要件としている。これらの科目群を担当するのは、心理学・教育学などを専門とする教員であり、心理学・教育学の知見をベースとして授業内容が作成されている。

科目群の中で特に「EQトレーニングⅠ（1年次開講）」「EQトレーニングⅡ（2年次開講）」「EQトレーニングⅢ（3年次開講）」は、一つ一つの科目を継続的に受講して積み重ねることで、上記の【Ⅰ】【Ⅱ】【Ⅲ】を習得できるように授業が組み立てられている。「EQトレーニングⅠ」では「セルフコントロール&コミュニケーション」および「自己理解と他者理解」を、次の「EQトレーニングⅡ」では「チームビルディング&リーダーシップ」および「目標達成のための集団形成能力」を、最終的に「EQトレーニングⅢ」を受講することで、「ソーシャリティー」および「社会・環境に適応したマネジメント能力」を獲得するように構成されている。

本稿では特にこれらの科目群から、EQ教育のスタートとなる「EQトレーニングⅠ」を取り上げ、その内容と教育効果について報告する。さらに同時期に開講される「EQトレーニングⅡ」についても、3.6で簡単に触れる。

### 3.4 徳山大学が育成対象とする8つのEQ

徳山大学ではさらに、EQ教育プログラムを通して育成するEQ力として、表1の8つの能力を心理学的因子として整理した(岡野・石川, 2014; 小松・岡野・石川, 2016)。表1の横軸にある〈自己対応〉〈対人対

応〉とは、それぞれ能力の質、能力の対象を表し(自己についての能力か、他者に対する能力か)、縦軸の〔認識・理解〕〔制御・管理〕〔表現〕は、機能・はたらきを表している。

次に、8つのEQ因子について簡単に説明する。詳細については、小松他(2016)を参照いただきたい。

①自己認識 「自己肯定意識」と「自我同一性」からなる。自分自身をどれくらい肯定的に捉えているか、自分らしさ(自我同一性)をどの程度、大切にしているかを表す。

②自立性・柔軟性 自分自身をどの程度、尊重しているかという「自尊感情」からなる。

③目的達成力 自分が行動の主体であると確信していること、自分の行為を自分が統制しているという信念、すなわち「自己効力感」からなる。

④打たれ強さ・忍耐力 自分自身が経験する様々な出来事(ストレス)を、どのように受け止め対処(コーピング)するかという、「ストレスコーピング」からなる。

⑤他者理解・共感性 他者の感情を理解できているか、他者の感情に共感できているかを表す。

⑥自己表明力 自分の感情や考えを、自分と相手の立場を尊重しつつ、その場にふさわしい方法で率直に表現する行動、すなわち「アサーション(自己主張)」を表す。

⑦チームビルディング 集団で行動する際、チーム全体の利益を考えて行動するのか、一人一人が協同作業をどう考え認識しているかという、「協同作業認識」

「集団形成力」を表す。

⑧ソーシャルティーマン 集団の中で他者とうまくコミュニケーションをとり、対人関係を円滑にすすめる「社会的スキル」を表す。

小松他(2016)では、これら8つのEQの心理学的因子を測定する「新EQ質問紙」を開発した。本稿では、科目「EQトレーニングⅠ」の受講前後に「新EQ質問紙」を実施し、その教育効果について測定した研究について、3.5.4において報告する。

### 3.5 科目「EQトレーニングⅠ」

#### 3.5.1 EQトレーニングⅠの概要

「EQトレーニングⅠ」は、徳山大学に入学した新入生が対象である。開講時期は、4月の入学式後から前期開講までの間(4月第1週)であり、国立山口徳地青少年自然の家(山口県山口市徳地)において2泊3日の宿泊研修形式で行われる。毎年約300名程度の新入生が参加する。全学の新入生が受講対象であり、日本人学生だけでなく、同様に留学生も受講する。

授業(研修)の運営・実施には、本学の教職員の他、同じ「EQ教育系」の科目「EQトレーニングⅡ」の受講者である2年次以上の学生が、運営サポート学生(「リーダー学生」および「スタッフ学生」と呼ばれる)として参加している。したがって、「EQトレーニングⅠ」受講学生は、教職員による指導・教育と、サポート学生からの教育補助を受けながら、2泊3日のEQトレーニングⅠを受講する。

受講者は、8クラスに分かれて受講する。日中にある、徳山大学の教員による講義・演習は基本、クラス別に実施されるが、それ以外にも研修中にはチームビルディング活動や、夕食後に行われる全体レクリエーションなど、全クラス合同で行うものなどもある。次項において、主に講義・演習内容について説明する。

#### 3.5.2 2016年度の講義・演習内容

2016年度の「EQトレーニングⅠ」は、4月5日(火)から7日(木)まで、国立山口徳地青少年自然の家において、2泊3日で実施された。主なタイムスケジュールは、表2の通りであった。

表2 タイムスケジュール

第1日目	
時刻	
9:20	大学集合・出発
11:00	入所式
11:45	昼食
13:30	【講義・演習①】(講義時間:240分)
17:30	夕食・自由時間
19:15	アイスブレイク(クラス別)
20:15	入浴・自由時間
22:00	就寝
第2日目	
時刻	
6:30	起床
7:15	朝のつどい
7:30	朝食
9:15	【講義・演習②】(150分)
11:45	昼食
13:30	【講義・演習③】(225分)
17:15	夕食
18:45	全体レクリエーション(全クラス合同)
20:15	入浴・自由時間
22:00	就寝
第3日目	
時刻	
6:30	起床
7:15	朝のつどい
7:30	朝食・掃除
9:15	【講義・演習④】(150分)
11:45	昼食
13:30	退所式
14:50	大学到着・解散

上記のスケジュールの中で、教員主導で実施される授業は、表2の、第1日目午後【講義・演習①】、第2日目午前【講義・演習②】、同日午後【講義・演習③】、第3日目午前【講義・演習④】である。内容は、A)からQ)の単元に分かれている。次に各単元の内容について簡単に述べる。

#### 《第1日目午後【講義・演習①】》

はじめに…EQについて知る。「EQトレーニングⅠ」の目的を知る。

- A) 自分のEQを知る(質問・アンケート)…新EQ質問紙に回答する(受講前測定)。
- B) 自分について知る(自己概念・20答法)…自分自身の自己概念について、20答法を用いて知る。
- C) お互いについて知る(名前を覚える)…ゲームを通して、クラスメイトお互いの名前を知り、打ち

解ける。他者の知る第一歩として実施した。また、アイスブレイクの目的もあった。

- D) 自分を知ってもらう（自己呈示・自己紹介の準備）…B) で明らかにした自己概念の中から、他者に伝えたいこと（=自己呈示したいこと）を選び、自己紹介文作成の準備をする。
- E) 自己紹介文を書く…1分間の自己紹介文を作成する。
- F) 話す態度と聞く態度（発表と傾聴）…G) の自己紹介発表会に向けて、発表する姿勢・態度および他者の発表を傾聴する姿勢・態度を学ぶ。
- G) 自己紹介の発表会…クラス全員の前で、1分間の自己紹介発表をする。

H) 自己紹介発表会をふりかえる

《第2日目午前【講義・演習②】》

- I) 自分の感情をコントロールする…感情の種類・生じ方について学ぶ。自分自身の感情体験をふりかえる。
- J) 身体をリラックスさせる…自分の感情をコントロールする方法として、気持ちを落ち着かせるリラックス法（筋弛緩法）を学び、実践する。
- K) “認知のゆがみ”に気づく…認知行動療法をベースとした“認知のゆがみ”の概念を知り、誤った認知・ものごとのとらえ方（=認知の歪み）に気づき、ネガティブな感情をコントロールする方法を学ぶ。

《第2日目午後【講義・演習③】》

- L) 適切に自己主張する（アサーション）…自分自身と相手をもとに尊重する、自己主張の仕方（アサーション）を学び、実践する。
- M) チームになる…N) のチームビルディング活動の前に、チームとは何か、単なる集団ではなく、“チーム”になるための条件を学ぶ。また、各グループで達成目標を決めて、全メンバーの役割分担を決める。
- N) 交渉ゲーム（チームビルディング）…チームビルディング活動をする。グループ間での物の交渉・交換をするゲーム（交渉ゲーム）を通して、ここまでに学んだ他者の理解、傾聴、自己感情のコントロール、自己の適切な表現（アサーション）などを実践する。単なる集団・グループからチーム

になる体験をする。

O) チームビルディングをふりかえる。

《3日目午前【講義・演習④】》

- P) 自己実現と自尊感情…キャリア形成に必要な自己実現（他の誰とも違う、自分らしい行動様式を求めること）と、そのために重要な自尊感情（自己概念を、全体として肯定的に評価すること）について学ぶ。
- Q) 大学生活の計画…これから大学4年間の計画を立てる。まずは、1年後、2年後、3年後、卒業時に自分がなっていたい状態を明確にし、その状態を達成するために必要な1年次の行動計画を具体的に立てる。

3日間で学んだこと…講義で学んだことのまとめを行う。新EQ質問紙に回答し（受講後測定）、講義内容について問う最終レポートに解答する。

以上の「講義・演習」は、クラス担当教員がスクリーンにスライドを提示しながら講義形式で進めていく（クラス担当教員は、事前研修において、授業内容作成教員から講義・演習内容の研修を受けている）。受講者は事前に配布された講義テキストと合わせて、講義内容を理解していく。各單元では、ワークシートによる課題取組みが準備されており、教員の指導、サポート学生の補助のもと、受講生はワークシートに取り組み解答することで、講義内容を理解し、EQ力を身につけていく。ただし、單元N)の交渉ゲームは、実習形式である。グループに分かれ、屋外でオリエンテーリングをしながら同時に、交渉ゲームという他グループと決められた物々交換をするゲームをすることで、それまでに学んだ適切な自己主張（アサーション）や、他者理解（共感性）、自己の感情コントロールなどを実践し、チームを形成していく。以上が「EQトレーニングI」の「講義・演習」の内容である。

### 3.5.3 講義・演習内容とEQの対応

各單元が、徳山大学が育成対象とする8つのEQ力のうち、どのEQ力と対応しているのかについて、表3に示す。

「EQトレーニングI」は、徳山大学のEQ教育で最

表3 各単元で育成するEQ

「講義・演習」プログラム	育成対象のEQ
A) 自分のEQを知る(質問・アンケート)	①自己認識
B) 自分について知る(自己概念・20答法)	①自己認識
C) お互いについて知る(名前を覚える)	⑤他者理解・共感性, ⑥自己表明力
D) 自分を知ってもらう(自己呈示・自己紹介の準備)	①自己認識, ②自立性・柔軟性
E) 自己紹介文を書く	①自己認識, ②自立性・柔軟性, ⑥自己表明力
F) 話す態度と聞く態度(発表と傾聴)	⑤他者理解・共感性, ⑥自己表明力
G) 自己紹介の発表会	⑤他者理解・共感性, ⑥自己表明力
H) 自己紹介発表会をふりかえる	(活動のふりかえり)
I) 自分の感情をコントロールする	①自己認識
J) 身体をリラックスさせる	④打たれ強さ・忍耐力
K) “認知のゆがみ”に気づく	④打たれ強さ・忍耐力
L) 適切に自己主張する(アサーション)	⑥自己表明力
M) チームになる	⑦チームビルディング
N) 交渉ゲーム(チームビルディング)	⑦チームビルディング, ⑧ソーシャリティー
O) チームビルディングをふりかえる	(活動のふりかえり)
P) 自己実現と自尊感情	②自立性・柔軟性
Q) 大学生生活の計画	②自立性・柔軟性, ③目的達成力

初に受講する科目でもあることから、EQ力の中でも基盤となる①自己認識、②自立性・柔軟性など、自己対応に関するものを育成対象として重視している。また、他者とのコミュニケーションの基盤である⑤他者理解・共感性なども取り入れている。そして、次のステップである「チームビルディング&リーダーシップ」および「目標達成のための集団形成能力」の獲得を想定して、チームビルディング活動を取り入れている。次項では、2016年度に実施した「EQトレーニングI」の教育効果の測定研究について報告する。

### 3.5.4 教育効果の測定

2016年度に実施した「EQトレーニングI」の教育効果を測定した。

#### 方法

**対象者** 徳山大学新生である日本人学生209名(男性173名, 女性36名)。

**EQ質問紙** 小松他(2016)で作成した新EQ質問紙32項目を使用した。①自己認識, ②自立性・柔軟性, ③目的達成力, ④打たれ強さ・忍耐力, ⑤他者理解・共感性, ⑥自己表明力, ⑦チームビルディング, ⑧ソーシャリティーの8つのEQ(心理学的因子)をそれぞれ4項目で測定した。したがって、8つのEQ力×4

項目の、計32項目で構成されていた。質問紙は、紙媒体で実施した。回答の選択肢は、いいえ(1), どちらかといえば、いいえ(2), どちらともいえない(3), どちらかといえば、はい(4), はい(5)の5点尺度であった。対象者が32の質問項目それぞれについて、自分の回答にあてはまるものを1から5の選択肢の中から一つ、選んで回答する形式であった。

**実施時期** 受講前の測定は、第1日目の【講義・演習①】の中の「A) 自分のEQを知る(質問・アンケート)」において実施した。受講後の測定は、第3日目の【講義・演習④】の中の「3日間で学んだこと」の中で実施した。

#### 結果

**8つのEQ得点の算出** 学生ごとに、8つのEQ力の得点を算出した。具体的には、各EQ力を測定するための4項目の回答値(1点から5点)の平均を算出した。逆転項目は6から素点を引いたものを用いて、平均値を算出した。受講前と受講後に算出した8つのEQ力の得点の平均値を表4および図2に示す。

表4 受講前後のEQ得点の平均値

	①自己認識	②自立性・柔軟性	③目的達成力	④打たれ強さ・忍耐力	⑤他者理解・共感性	⑥自己表明力	⑦チームビルディング	⑧ソーシャルリティー
受講前	3.72	3.17	3.32	3.29	3.67	3.89	4.16	2.82
受講後	4.06	3.51	3.69	3.61	3.99	4.10	4.37	3.44

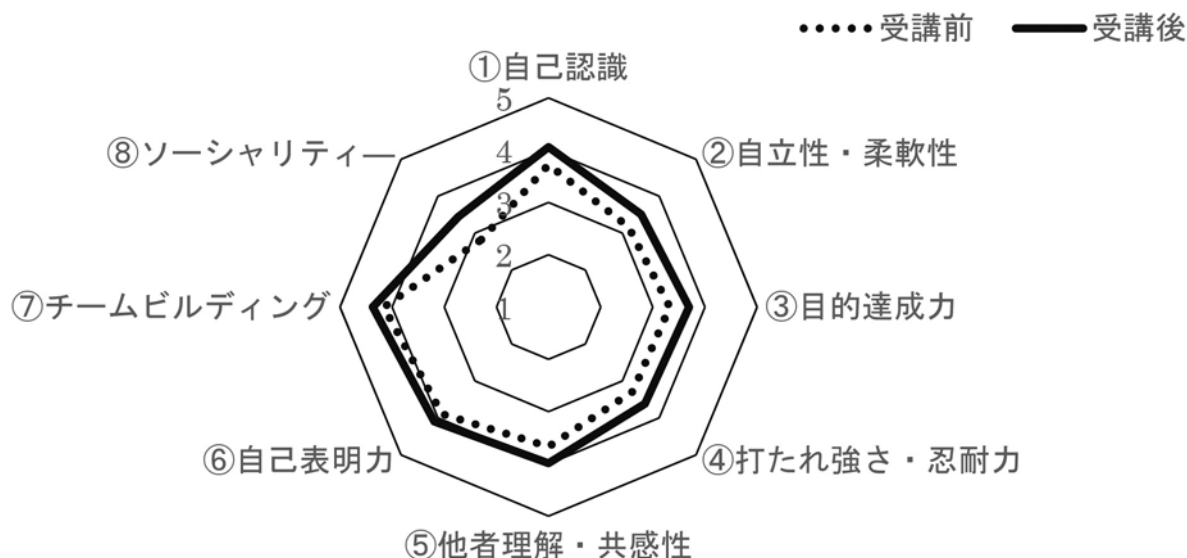


図2 受講前後の8つのEQ得点の変化

**統計的検定** 8つのEQ得点それぞれについて、受講前と受講後の平均値間に統計的に有意な差があるのかを検討するため、*t*検定を行った。その結果、すべてのEQ力において、有意差が認められ、受講前よりも受講後の方が有意に得点が高かった（①自己認識：*t* (208) = -9.71, *p* < .01; ②自立性・柔軟性：*t* (208) = -8.82, *p* < .01; ③目的達成力：*t* (208) = -9.50, *p* < .01; ④打たれ強さ・忍耐力：*t* (208) = -9.15, *p* < .01; ⑤他者理解・共感性：*t* (208) = -9.79, *p* < .01; ⑥自己表明力：*t* (208) = -5.71, *p* < .01; ⑦チームビルディング：*t* (208) = -6.92, *p* < .01; ⑧ソーシャルリティー：*t* (208) = -14.40, *p* < .01).

以上の分析結果をまとめると、8つのEQ力すべてにおいて、受講前よりも受講後の方が有意に高くなっており、「EQトレーニングⅠ」を受講することによって、教育効果が見られたと言える。

特筆すべき点は、受講前のEQ得点を見た場合、徳山大学の新生はソーシャルリティーが低いことがあげられる。受講前のソーシャルリティーは2.8点であった(表4参照)。しかし「EQトレーニングⅠ」の受講後、

3.4点までにあがった。「EQトレーニングⅠ」自体は、ソーシャルリティーを向上させることを主目的としておらず、どちらかと言えば、自己の感情の理解や表現、他者の感情理解など、EQの中でも基盤となるようなものに主眼を置いていたが、トレーニング内容によっては、ある程度の向上が見られることがわかった。他のEQ力と比較すると、まだ向上させる余地があると考えられる。ソーシャルリティーは、「EQ教育系」の科目の中でも「EQトレーニングⅢ」において身につけるべき力であり、今後「EQトレーニングⅡ」「EQトレーニングⅢ」を受講することによって、卒業までにこれらの能力をさらに向上させることが期待される。

### 3.6 科目「EQトレーニングⅡ」について

以上が入学式後に開講される新生対象の「EQトレーニングⅠ」の内容であったが、同時期に2年生以上を対象に開講される科目として「EQトレーニングⅡ」がある。開講時期は2月から3月の春期休業期間中から「EQトレーニングⅠ」の本番までである。授



業内容は、「EQトレーニングⅠ」本番時に先輩学生として新入生の教育補助を行ったり、教室への誘導、食事・入浴の誘導を行ったりすることを通して、リーダーシップや集団マネジメント能力を向上させるものである。さらに、表2の「EQトレーニングⅠ」のタイムスケジュール内のクラス別「アイスブレイク」と、全学生参加の「全体レクリエーション」の企画・運営を行う。科目担当教員の指導・教育のもと、受講者たちは、徳山大学が掲げるEQ力の中でも「チームビルディング&リーダーシップ」および「目標達成のための集団形成能力」を身につけていく。このように、「EQトレーニングⅠ」の受講経験を踏まえた上で、次年度「EQトレーニングⅡ」を受講し、今度は後輩を指導・教育・サポートする側に立つことで、EQ力の積み重ねが可能になる。このような「循環型」と言えるような、科目の配置、授業形態もこのEQ教育プログラムの特色と言えよう。

#### 4. 最後に

小学生や中学生ならまだしも大学生にまで、EQトレーニングを実施する必要はないという意見もあるだろう。しかし、大学教育の現場は、そこまでやる必要があるほど、社会性のない、人に共感できない、感情抑制のできない学生が増えてきているという実感がある。社会に入れば、計算が速い、記憶力が良いといったいわゆるIQに関わる能力よりも、温かみある、気が利く、感情的にならない、チームをまとめる力があるといったEQの高い能力が求められる状況が多いと思われる。徳山大学の教育実践例は前例のほとんどないパイオニア的試みであり、今後の発展が期待される。

ただ、一つ気になるのは、EQは高ければ高いほどよいのかという点である。とりわけ、「他者理解・共感性」が高すぎると、常に他人の挙動が気になり、自分らしく振舞うことが出来にくくならないかということである。しかし過剰な「他者理解・共感性」が問題だとすれば、どの程度がベストなのか、この点は今後、つめる必要がある。

#### 謝辞

「EQトレーニングⅠ」の実施に際しては、徳山大学の多くの教職員の皆様に、多大な協力をいただいた。ここに記して、心より謝意を表す。

#### 引用文献

- 中央教育審議会. 2011. “今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）”. [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afeldfile/2011/02/01/1301878\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afeldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf), (2016-12-10).
- Goleman, D. 1995. *Emotional Intelligence: Why it can matter more than IQ*. New York: Bantam Books.
- ゴールマン, D. 土屋京子 (訳). 1996. EQ—こころの知能指数. 講談社.
- 小松佐穂子・岡野啓介・石川英樹. 2016. “EQ教育の効果測定のための尺度開発” 徳山大学総合研究所紀要. 38, 75-84.
- マッシューズ, G. 小松佐穂子 (訳). 2011. “第2章 情動的知性と知能” 現代の認知心理学7 認知の個人差. 北大路書房, 26-51.
- Mayer, J. D. Salovey, P., & Caruso, D. R. 2002. *The Mayer-Salovey-Caruso Emotional Intelligence Test (MSCEIT): User's manual*. Toronto, Canada: Multi-Health Systems.
- 日本経済団体連合会. 2009. “2008年度・新卒者採用に関するアンケート調査結果” <https://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2009/034kekka.pdf>, (2016-12-10).
- 岡野啓介・石川英樹. 2014. “地域活性化人材に求められる能力とその測定指標—EQ教育の効果の可視化を目指して—” 徳山大学論叢. 79, 27-53.
- Salovey, P., & Mayer, J. D. 1990. Emotional intelligence. *Imagination, Cognition and Personality*, 9, 185-211.